慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本の成人の「カラオケ習い事」の持つ意味
Sub Title	Japanese adult learning : the meanings of karaoke naraigoto
Author	渡辺, 英男(Watanabe, Hideo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.111 (2004. 3) ,p.145- 170
JaLC DOI	
Abstract	Currently many Japanese housewives and retired people enjoy learning karaoke (karaoke naraigoto) at community centers and karaoke bars. The phenomenon of choosing karaoke as learning reflects adults' increasing appreciation of individualized and egalitarian types of social affiliation in the Japanese society. Postwar education's emphasis on individualism and egalitarianism has increased their interest in the individual, and respect for individual idiosyncrasies is pervasive among the Japanese. This newer multi-purpose learning allows students many individual benefits and perfectly matches the present Japanese inclination. The individualized activity is based on students' interests and is self-directed, and so studying karaoke is not "education" but "learning." Different from traditional forms of learning, this dynamic activity allows students to experience other worlds and to establish a new sense of identity, which is the essence of "learning."
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000111-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

日本の成人の「カラオケ習い事」の持つ意味

渡　辺　英　男*

Japanese Adult Learning: the Meanings of Karaoke *Naraigoto*

Hideo Watanabe

Currently many Japanese housewives and retired people enjoy learning karaoke (karaoke *naraigoto*) at community centers and karaoke bars. The phenomenon of choosing karaoke as learning reflects adults' increasing appreciation of individualized and egalitarian types of social affiliation in the Japanese society. Postwar education's emphasis on individualism and egalitarianism has increased their interest in the individual, and respect for individual idiosyncrasies is pervasive among the Japanese.

This newer multi-purpose learning allows students many individual benefits and perfectly matches the present Japanese inclination. The individualized activity is based on students' interests and is self-directed, and so studying karaoke is not "education" but "learning." Different from traditional forms of learning, this dynamic activity allows students to experience other worlds and to establish a new sense of identity, which is the essence of "learning."

* ウイリアムパタソン大学（言語文化）

1. 本研究の課題

日本の成人の習い事においてある変化がおきている．伝統的な習い事に代わって，新しい習い事に人気が集まってきている．歌謡の分野で言えば1980年代以降，伝統的な習い事である民謡，詩吟などを習う人が減ってきている．一方この伝統的な歌謡の習い事の低迷とは対象的にカラオケを習い事として学ぶ人が増えている．

カラオケは一説に1972年に神戸で発明されたといわれている．その人気は1980年代に急増した．その後カラオケの人気は全国的に広まり，ピークは越えたものの，現在，沢山の人が個人経営のカラオケ教室や地区センターを利用したサークルやバーでカラオケを習っている．

カラオケを習っている人は中高年齢層が圧倒的に多く，中でも家庭の主婦や定年退職者が多い．その大方は，今まで家事で手が離せなかった主婦や，長い会社生活で余暇の時間をもてなかった会社員が，その時期を終えて自分の時間を楽しみたいというのである．

伝統的な歌謡からカラオケへの人気の移行は単に成人の歌の趣味が変わったいうのではない．カラオケの習い事としての性格が従来の習い事とは違う特徴を持ち，そしてその特徴が現代人の習いごとの考え方に合っているからだと考えられる．

従ってこの論文の第一の目的はカラオケが習い事としてどんな特徴を持っているかを明らかにすることである．習い事をする人達の興味がカラオケへ移行しているが，それはどのような社会的意味をもっているか，それを明らかにするのが第二の目的であり，そうすることによって日本の成人の習い事の意識が明らかになると思う．そして学習者の中にはカラオケを習うことによって自分自身が変わったという人がいるが，それは教育的観点から考えた場合どういう意味をもっているのか，その解釈をするのが第三の目的である．

表1　日本の成人の伝統的な習い事の人気の推移

	1982年	1985年	1988年
民謡	1.2%	1.3%	0.7%
詩吟	0.8%	0.7%	0.7%
謡	0.3%	0.1%	0.0%
小唄，長唄，浄瑠璃	0.0%	0.1%	0.1%

2. 先行研究

従来の日本の習い事の研究には一定のパターンがある．調査対象の習い事が茶道 (Anderson 1991) や弓道 (Herrigel 1989) などのように伝統的なものに集中していることである．そしてそれらの習い事では技術の習得や組織の存続が関心の対象になっており，「型」や「家元」(*Iemoto*, Hsu, 1975) が問題になる．例えば，「華道の型は具体的に流派によって異なるようだが，『天・地・人』とか，『真・行・草』という基本型を考えている点は共通らしい．茶道の方では『お手前の型』とか飲み方の『型』というものがあって，これらはその当事者たちによって『礼』の場合と同じく『作法』という名前で呼ばれているが，この作法というものも亦も一種の『型』なのである．また踊りや歌舞伎の世界における『所作』もやはり型なのである」といった具合である（源 1992)．

このような従来の習い事の観点は Spindler の education の説明と共通したところがある．Spindler によれば「教育は文化の伝達」(1987）であり，ある文化のシステムにおいて，技術，知識，姿勢，価値観は子供たちが考え方や行動の仕方をきちんと学ぶために伝達される．そして教師はクラスにおいて文化を生徒に伝達する役割を持ち，生徒はそれを受ける存在である．

先行研究の今ひとつの特徴は学習を技術や知識の獲得と見なしている点

である．別の言い方をすればそのような研究は一様に学習者の人間性の変化への視点が乏しいが，この点においてLeaveとWengerはSituated Learning: Legitimate peripheral participationにおいて貴重な提言をしている．学習は人間全体に関わるものであり，ある具体的な活動だけでなく社会コミュニティーとの関係をも含んでいる．学習とは新しい活動に関わって新しい課題や機能を全うし，新しい理解がなされることでもある．活動，課題，機能，理解は互いに関係をもっており，人はその関係に規定されると同時にその関係を規定している．従って学習というのは，こういった関係のシステムの中で，新たなアイデンティティーが形成され，新しい人間として生まれ変わるものであるといえよう (Leave and Wenger 1991)．この Legitimate peripheral participation (LPP) 理論は本稿の理論的背景になるもので，その内容については次の章でさらに説明する．

3. 理論的背景

本稿は主に Jean Lave と Etienne Wenger の LPP 理論にその理論的背景を委ねている．その理論は色々な側面をもつが，本章ではカラオケ習い事と特に関連する部分を紹介する．

まず第一に Learning is the learner's participation in a community of practice. という概念である．'community' の具体例としてLaveとWengerは助産婦や仕立て屋の例をあげている．LaveとWengerは「学習とは学習者が実践のコミュニティーにおいて初めは端にあって，徐々にそれに携わりその複雑さを増していくものである」と説明している．この概念において必要な知識や技術や文化は実践のコミュニティーの参加を通じて獲得される．

第二番目はLearning is not merely a condition for membership but is an evolving form of membership. という概念である．「学習とは

単に，メンバーとして存在している状態を意味するものではなく，メンバーとしての状態が変わっていく，その変化を意味する.」従来の学習の説明は知識を内面化するものと捉えられていたが，LLP 理論では学習者は単に文化を受け入れるのではなく，それを生み出すものだと見ている.

第三番目は Learning is a process for the learner to become a full member of a community of practice, and results in him/her gaining a new sense of identity. という概念である.「学習とは学習者がある実践のコミュニティーの完全な一員となっていく過程であり，そして学習の結果として新しいアイデンティティーの自覚を持つようになる.」Leave と Wenger は別の面で「学習とアイデンティティーの自覚は区別することができず，それらは同じ現象の別の一面である」と説明している.

4. 調 査 方 法

研究員は 1997 年 7 月より一年余り日本に滞在して，当研究のフィールドワークをした. カラオケ習い事は全国的に広がっていてフィールドワークの候補地としては色々なところが考えられる. 研究員は研究結果の客観性を保つため 2 つの違ったタイプの土地を選んで調査することにした. まずその一つは 300 万以上の人口をかかえる大都市である横浜である. 研究員は横浜に自宅があるため便宜上そこを調査場所の本拠地として選び，1 年間程滞在した. 大都市に対して中堅都市も選び，愛知県の西尾市で調査した. 西尾は名古屋の南東にある人口 11 万の町であるが，研究員の故郷でもあり，そこに 3 週間滞在した.

カラオケを習う場所としては色々な形態があるが代表的なものを 3 つ選んだ. 1) 一番組織だっているカラオケ教室と，2) 地区センターで行われているカラオケ自主サークルと，3) カラオケを備えたバーである. 第一番目のカラオケ教室はそのサンプルとして二箇所，カラオケサークルは五箇所，カラオケバーは一箇所選んだ. その会の簡単な特徴を一覧にした

表2　カラオケ習い事の場所

	生徒数 職業	教師の性別 年齢 経歴	場所 授業数(月) 授業料(月)	生徒の関心	組織の特徴
夢カルチャー	30人 主婦 OL	男性38歳 歌手，日本舞踊と絵の教師	スタジオ カラオケボックス 月に4回， 8,000円	歌を学ぶこと，社交，カラオケコンテスト，歌謡ショー	全国組織 プロの道 相互扶助
みはる歌謡アカデミー	20人 OLとサラリーマン	男性62歳 ピアノ伴奏者	スタジオ 月に4回， 6,500円	社交 会員の結束	地方組織 コンテストの開催，自治，ビジネスマン対象
第一双葉会	25人 主婦 退職者	男性72歳 詩吟教師	地区センター， 月に3回， 1,500円	社交 健康のため	権威的 教師と生徒の分離
第二双葉会	25人 主婦 退職者	男性72歳 詩吟教師	地区センター，月に3回，1,500円	社交 健康のため	権威的 生徒は教師に協力的
紅葉会	15人 主婦 退職者	教師なし	地区センター，月に2回，120円	社交 健康のため	自治 活動を教師に秘密
竹田サークル	7人 主婦 退職者	教師なし	地区センター，月に2回，1,800円	歌を学ぶこと 健康のため	自治 会員同士の対立
リンダ・クラブ	12人 主婦	男性60歳 作曲家	地区センター，月に2回，240円	歌を学ぶこと 健康のため	自治，自主性，柔軟で自由な雰囲気
カラオケバー， カラオケボックス	34歳の男性，36歳の女性， その他の客	女性 50歳 バー経営者 仲間同士で勉強している	カラオケバー，3,600円 カラオケボックス 1,200円	歌を学ぶこと，コンテスト，付き合いを求めて	その日その場の練習，不定期，動的自発的，パーフォマンス中心

ものが第2の表である.

カラオケの生徒はこの全ての会において女性のほうが多い. 大半は中高年であることはすでに述べたが, 実際30代以下でカラオケを習っている人はまれで, 研究員も一年余りのフィールドワークの期間に数える人しかあっていない. その年代の歌う曲は演歌が主流である. 中には教室によってポップスやシャンソンなどの歌を習うこともあるが, 大半のカラオケの生徒は歌を歌うこと自体慣れていないため, 課題曲として渡された流行の歌を歌うことが多い.

研究員は以上のように8つのカラオケを習う集まりで調査したが, 調査方法として観察と聞き取りと統計調査をした. 殆どのカラオケの集まりは一週間に1回程度練習があるため, 研究員はその練習場に通ってどのように生徒がカラオケを習うのか観察したり, 実際自分自身も会のメンバーとして所属して, 同じようにカラオケを習ったり, ショーやコンテストに参加したりした.

聞き取り調査は横浜と西尾の両方の地区で行ったが, 教師や生徒にインタビューをしてカラオケを始めた動機や, 会の様子や, カラオケを習うことによって何か変化が自分自身に感じられるかなどを聞いた. 統計調査で

表3　カラオケ（習い事）の披検者の人数

インタビューによるデータ			
横浜	生徒　19人	教師　8人	他の人　20人
西尾	生徒　4人	教師　5人	他の人　2人
合計	生徒　23人	教師　13人	他の人　22人

調査表によるデータ		
横浜	生徒　103人	一般人　62人
西尾	生徒　134人	一般人　73人
合計	生徒　237人	一般人　135人

は，カラオケを習う理由をはじめ，カラオケに行く回数や，かかる費用や，歌う曲や学んだことや，他の習い事との比較などを書いてもらった．表3はその披検者の人数の一覧である．

5. そ の 他

カラオケ習い事の調査分析に入る前に，予備知識として次の三点に触れておきたいと思う．

(1) カラオケ習い事の流れ

(2) カラオケの会の性格

(3) 伝統的な歌謡とカラオケの比較

(1) カラオケの流れ

1972年　カラオケが神戸で発明された（一説）．

1978年　ホームカラオケが家庭用として普及し始めた．

1980年代　この頃からカラオケを習う人がでてきた．

1985年　カラオケボックスの登場によって，カラオケのイメージが一変し，夜の酒場の娯楽ではなく，女性や学生が昼間カラオケを楽しむ一般人の娯楽に変わった．

1994年　カラオケの人気の最高潮の時代で，この年に国民人口の半分近くがカラオケを経験したと推定されている（クラリオン株 1995）．

1990年前半　沢山のカラオケクラブが作られ，カラオケコンテストやリサイタルが行われるようになった．

1998年　カラオケ人口が減少兆候を示し始め，カラオケボックスも減り始めた．

現在　カラオケボックスは以前に比べるとかなり減ったが，カラオケ習い事の人気はあまり変わらない．

(2)　カラオケの会の性格

夢カルチャー

個人経営のカラオケ教室である．その教室の教師である鈴木先生は38歳だが，もっと若いころはプロの歌手であった．生徒数は30名程度でスタジオやカラオケボックスを借りて練習している．鈴木先生はカラオケだけでなく踊りや油絵も教えており，芸術家として高い資質を持っている．鈴木先生が目指すゴールは高く，多くの生徒がそれに十分応えきれず，教師は自分の理想と現実のギャップに悩んでいる様子であった．研究員はこの鈴木先生の下でカラオケを教えてもらったが，その的確な指導はカラオケ教師の中でも傑出していた．夢カルチャーには4〜5名の古手の生徒さんがいて，それらの生徒は鈴木先生のよき理解者でもあり，また会を運営する強い協力者でもある．

みはる歌謡アカデミー

夢カルチャーと同じ「カラオケ教室」であるが，性格はかなり違っている．夢カルチャーは鈴木先生が運営者であるのに対し，みはる歌謡アカデミーは生徒が自主運営をしている．20名ぐらいの生徒で，大半は仕事を持っており，一週間に一度開かれるこのカラオケ教室に仕事が終わってから集まる．教師は以前はピアノバーの奏者であった．しかしカラオケの人気と共にその職を失い，現在はこの教室と自宅でカラオケを教えている．みはる歌謡アカデミーは社会的な活動に意欲を燃やしており，カラオケを通じて横浜の住民に色々な貢献をしている．例えばカラオケコンテストを定期的に開催したり，某テレビ局との提携によってテレビでのカラオケ番組の協力をしたり，公共のホールを借りて地域住民に無料でカラオケ練習

の場を提供したりしている.

第一双葉カラオケクラブと第二双葉カラオケクラブ

この二つのサークルは同じ教師で運営されている. そこの教師である富田先生はカラオケを教える前は詩吟の先生だった. 詩吟の会でカラオケを同時にやりたい生徒がいて, それをきっかけでカラオケも教え始めることになった. しかし詩吟の方は生徒が集まらず閉会することになり, 結局双葉会というカラオケの会だけに専念することになった. カラオケを習いたい地域住民は多く, 双葉会は生徒の定員25名を越す状態で, もう一つ会を作ることになり第一第二双葉会へとなった. 富田先生は権威的な面があり, 生徒は先生を敬遠する傾向があった. ただ第一双葉と第二双葉は同じ教師の下であるにもかかわらず, 会の雰囲気はかなり違っている. 第一双葉会の方は古い生徒が教師の近くに座り, 男女によって座る席が分かれおり, 女性はお茶を入れ, 男性は教室の掃除をするというはっきりした性別分担があった. それに対して第二双葉会の方は席も会の役割も男女の区別が無いだけでなく, 第一では生徒が富田先生にお茶を出していたのに対し, 第二では先生自身が飲むお茶は自分で用意していた.

紅葉会

双葉会（第一及び第二）の生徒と地域のカラオケ愛好者からなる自主サークルである. 地元の地区センターを借りて月2回開かれている. 自分の好きな歌を順番に披露するだけで, 自分の番でない時は他人の歌を聞きながら茶菓子で談笑するリラックスした雰囲気である. 会の存在自体は双葉会の富田先生は知らず, 特に歌の指導者もいない自分たちで「楽しむ会」である.

竹田サークル

竹田サークルは私を含めて7人しかメンバーがいなく，私が観察したカラオケの会の中では一番少ない．創立者の竹田さんは自分がカラオケを歌いたくてこのサークルを作った．以前別の老人福祉施設のカラオケ教室に通っていたがその勉強期間が終わってしまったので，近くの地区センターを隔週ごと借りて練習を始めた．歌の指導者もいなく茶菓子の用意もせず単に集まって歌う簡易な会であった．連絡無しで欠席する会員がいてリーダーの竹田さんは会を続行すべきか迷っていた．

リンダ・クラブ

リンダ・クラブはリンダ（国際結婚で米国人になった日本人）がカラオケをやりたくて友達の青木先生にお願いしたのがきっかけで始まったサークルである．青木先生は会社を定年退職してから作曲家として音楽活動を続けている．他の章でも述べているが青木先生はその実力と人柄のため会員から強い支持を得ていた．清水さんは第二双葉会にも入会しているが，この青木先生の会はきちんとした歌の指導を受けたくて通っている．青木先生の個人個人の生徒に対する配慮とオープンな会の運営方針のためこの会は人気があり，私が入会していた頃は12名の小規模のサークルであったが（青木先生の指導する会はもうひとつ別の小さな会があった），3年ぐらいのうちに急成長して，現在は会員数は10倍以上に膨れ上がっている．

カラオケバー，カラオケボックス

今まで述べたカラオケの会はメンバーも練習日も固定していたが，このカラオケバー，カラオケボックスの場合はその日その日の集まる客によって構成される機会である．関内の夜の繁華街の一角にある「姫」というカラオケバーを説明したい．そのカラオケバーの経営者は敏子であり，その常連客は雅と歌子の30代の男女のカップルであった．二人ともカラオケが上手でカラオケコンテストの常連でもあった．特に雅は横浜地区でトップクラスの歌い手である．二人は基本的にカラオケの仲間として繋がっているが，歌子は雅にかなり惹かれていた．二人は週に一回ぐらい「姫」で待ち合わせて歌い，お互いの歌をコメントしているが，このような練習方法は結構広く行われている．

カラオケバーに来る客はそこに集まる人に関心のある場合が多いのに対して，カラオケボックスは純粋に歌を楽しんだり，歌の練習を目的で来ることが多い．雅と歌子の関係がくずれてから研究員はカラオケボックスで雅に直接歌を教えてもらうことが重なった．フィールドワークの終わり頃，夢カルチャーの発表会に出演することが決っており，その発表曲の一つが雅との男性デュエットによるポップス演歌であり，毎週土曜日には終電までカラオケボックスで雅と練習した．（もう一つの曲は鈴木先生の直接の指導で覚えた台詞入りの演歌であり，研究員は袴姿で発表した．）

(3) 伝統的な歌謡とカラオケの比較

カラオケの比較のため研究員は伝統的歌謡も調査した．代表的ものである謡，長唄，民謡，詩吟の4種の習い事のサークルを訪問して，練習風景を観察したりインタビューをした．伝統的な歌謡の間でも幾分性格の違いはあるが共通したところが多く，本稿はその共通点をカラオケと対比し

て掲げることにする．実際のところ，伝統的な歌謡とカラオケの違いを単に種目の違いだけで表すのは難しいことである．習い事の場合，個人とグループではかかる費用は当然変わってくる．また場の雰囲気も練習が個人宅で行われるか地区センターかということで左右されることが多い．研究員は調査をする前は伝統的な歌謡はもっと格式ばった形で練習されるかと思っていたが，地区センターではグループで練習しており，雰囲気はずっと和やかでリラックスしていた．

表4　伝統的な歌謡とカラオケの比較

	伝統的な歌謡 （謡，長唄，民謡，詩吟）	カラオケ
入会の動機	歌謡の技術向上に魅力を感じて入会している人が多い．	健康のためとか，友達作りなど，歌の技術向上以外の理由で入会している人も多い．
組織の特徴や練習方法	家元制度のため人間関係における上下意識が強い．型が重んじられ，練習は模倣，繰り返しによる．礼儀，礼節が学習内容の一部である．長期間一定の先生について習う．	家元制度はなく，教師生徒の関係も比較的自由である．初歩の段階は模倣が容認されるが，経験者には創造性，独創性が要求される．教室をかけもちしたり，先生を変えたりすることがよくある．
学習期間	10年，20年の長期間に渡る練習は特別なことではない．習い事をしている期間そのものにも意味があり，ある期間を置かないと先に進めないことがある．	生徒の学習年数は数年というのが多い．歌の技術次第で飛び級もあり，歌が上手であれば教師の資格は数年でもとれる．
技術習得	教本を使うこともあるが，教師の口伝による指導が多い．歌詞が漢語（詩吟）や古語（謡，長唄），方言（民謡）で書かれており，歌詞の意味を理解するのが難しい．	初心者はプロの歌をテープで聞いてメロディーを覚え，それを教師がコメントしたり自分で模範を示して指導することが多い．歌詞が現代語で書かれているため平易で覚えやすい．

6. 分　　析

調査の結果，カラオケ習いごとの特徴として以下のことが明らかになった．

(1) カラオケの会への参加の目的，理由が多岐に渡っていること．学習者は単に歌が上手になるために会に所属しているのではなく，健康にいいとか，交友関係のためにといったように色々な目的を持っている．

観察の結果，カラオケの歌の練習に熱心でなくても練習には来る人がいるということがわかっており，カラオケの生徒は色々な理由や目的があって練習の場にやってきているということは容易に想像されたが，実際，統計調査の「何故カラオケを習っていますか」という質問の回答は以下の通りである．

表5　カラオケを習っている理由

No. 1	歌うのは健康にいいから.	80%
No. 2	カラオケが上手になりたいから.	68%
No. 3	基本をきちんと習得したいから.	55%
No. 4	カラオケは他の習い事より安くて覚えやすいから.	49%

カラオケの上達でなく健康のためというのが一番の理由にあがっている．実際カラオケが健康のためにいいということは医学的にいえる．現役の医師である福田伴男はその点を「カラオケ健康法」の著書の中で説明している．また健康が第一の理由にあがる背景に，披検査者が圧倒的に中高年が多いということも考えられる．しかしどこのカラオケ教室にいっても若い人は非常に少ないため絶対数からいって，「健康のため」というのをカラオケ習い事の第一の理由と見なすのは妥当である．

カラオケを習ったことで何を学んだかという質問の回答は次のようである.

表6　カラオケを習ったことで学んだもの

No. 1	歌い方	88%
No. 2	他人とのコミュニケーション	46%
No. 3	自分自身（性格や能力など）について	38%
No. 4	世の中のこと（文化，歴史，地理，人の心など）	30%

この結果によると88%の生徒が「歌い方」を学んだと答えているが，逆に言うと，残りの12%の生徒は歌い方を学んでいるという実感がなくてカラオケを続けていることになる．実際，半数近くの人が「他人とのコミュニケーション」を学んだと答えており，そういう人はカラオケの会を歌より社交や気分転換の場所としてとらえているといえる.

ここで興味深い点は教師と生徒の意識のギャップである．教師は歌を教えることに力を入れていても生徒の方では別の捕らえ方をしていることがある．Wolcottは「文化の伝達者が伝えようとするものは文化の獲得者が獲得するものと同じではない」(1987)と述べている.

別のデータで興味深い点は，カラオケを2箇所以上のところで習っている生徒が結構いるという事実である（横浜42%，西尾22%）．カラオケの生徒は教室の状況についてお互いに情報交換をしていてよく通じている．例えば，地区センターのカラオケのサークルはほとんどお金がかからないから，そこで浅く広く習っておいて，気に入った歌は本格的に勉強するために別の先生について個人指導を受けるパターンがよくある．従ってカラオケ教室をいくつも渡り歩いている人も少なくなく，これは伝統的な歌謡の習い事と大きく違う点である.

伝統的な習い事と言われるものは複数の場所ですることはまれである．長唄の教師である久保先生はこのことに関して以下のように語っている.

「習い事はそれぞれ先生の型というものがあるため，複数の先生から長唄を習うのは難しいことです．生徒さんが他の先生から習っている場合にはそれは一回歌を聞けばすぐにわかります．また一人の先生のもとで習うのは，先生とのいい人間関係を保っていく上でも大切なことです．」詩吟の教師は型の模倣の重要さを強調している．「もし生徒さんが先生の型を真似たくないと思うなら，その人は詩吟を習はなくてもいいと思います．習い事では教師と生徒の信頼関係が大切です．教師の型に疑問を感じそれを無視することは先生に対して礼節を欠くことになります．」

「型」と関係して，ここでカラオケ習い事は本当に「習い事」かという点について語義的な興味から考察してみたい．「習い事」という言葉は言うまでもなく「習う」という言葉からきている．「習う」は大きく分けて三つの基本的な意味がある．(1) 繰り返してやってみて覚える．けいこする．練習する．(2) 教わる．教えを受ける．(3) 慣れてじょうずになる．習熟する．（金田一，池田，1978）第一の意味は，「学習する」と違ったニュアンスを持っている．「カラオケを学習する」とは言わないので，カラオケは「学習する」ものではなく「習う」ものなのである．つまり頭だけで覚えるものではなく，反復練習を重ねて体全体で覚えるものである．第二の「教わる」というのは「人から教えを受ける」という意味である．先生について「カラオケを教わる」のは実際行われていることであるが，カラオケは易しいので先生からの手ほどきはいらないと考える人が結構いる．特に伝統的な歌謡を習っている人の中でそういう声を聞いたし，若い人の間ではそう思っている人はきっと多い．そういう人はカラオケは「習うもの」ではなく単に「するもの」，「楽しむもの」であると考えているのであろう．第三番目の意味の「慣れて上手になる」というのはそれを習慣化するほどに行うことである．従って「習い事」は時間がかかるものだという前提が浮かぶ．さらに第四番目の意味だが，「ならう」を「倣う」と書き表すことができ，その意味からすると「習う」ことは「真似る」こ

とでもある．伝統的な習い事が一致して型の模倣を強調している現状からしてこのことは十分納得がいく．以上，カラオケ習い事は「習い事」かという問題をまとめてみると，「習う」という言葉の語義からして伝統的な習い事はその４つの意味がそのままあてはまるが，カラオケに関しては第二番目の「教わる」と第四番目の「真似る」という意味は必ずしもそうとは言えない．しかし実際カラオケを習っている人がいる現実からしてみると，やはり「習い事」であることには変わらず，この第二番目と第四番目の相違を考慮してカラオケは「新しい習い事」と見なすのが妥当であろう．

(2)　カラオケ習い事は他者から与えられるものではなく，学びたいから学ぶ，学習者自身の意思に基づく自発的活動であるということ．

学習と個人という問題に関連して，学習が学習者それ自体の営みであるのに対し，学習者への他からの働きかけが教育である．成人学習は教育者側の意図にもとづいて教えこむ営みではなく，学習者が自らの意思によって行う活動を側面的に援助するものである（辻，古野 1973)．

「あなたはカラオケを自分の意思で習い始めましたか」という質問に対して，横浜と西尾の生徒の 95% が自分の意思で始めたと答えている．習い事の中には必要にせまられて始めるものもいるが，カラオケは大抵の場合本人が楽しいからやり，楽しみが支えとなって続けている．

カラオケは伝統的な歌謡と異なり拘束が少なく自由な雰囲気がある．またカラオケを習う者は自分たちが望むように練習したいと思う気持ちが強い．例えば，生徒は発表会やコンテストはお金がかかるためあまり出たがらない傾向があるが，教師がその参加を強調するあまりに生徒が会をやめてしまうケースもある．

双葉会では生徒は教師の権威に一見従順であるように見えるが，実際は

直接の衝突を避けて賢明に振舞い，自分たちの要望は教室以外の別の場で満たしている．すでに説明したように双葉会の生徒は第一と第二が互いに合体して「紅葉会」という自主的カラオケサークルを作っている．双葉会では授業の前半は練習をし，後半に自由発表をすることになっているが，後半の場で教師の選んだ課題曲を歌うことを要求する教師のやり方に生徒は不満を持って，教師抜きで「紅葉会」という場を作っている．

権威的な教師が率いるサークルと対照的なのがリンダ・サークルである．青木先生は生徒の興味を反映するため，歌は教師が選曲しないで生徒に選ばせ，それを教師がその場で個人的にコメントを与えるという個別指導をしている．また生徒は他でカラオケを習っている場合はそれを教師に内緒にしているのが普通であるが，青木先生は生徒が他の場所で習うことに全く頓着しないので，生徒は他でカラオケを習っていることもオープンに話す．

さらに作曲家である青木先生は生徒一人一人に対して自作の曲を与えて，それを生徒は練習曲としている．Goodenough は「人は個人で学習をする．従って文化の学習がなされる場合，それは究極的に個人を軸にしなければならない」(1981) と述べている．また Pope と Gilbert は「学習は知識が学習者と個人的な関係があるときになされる傾向がある」(1983) と書いている．そして Rogers は学習と個人との関係を「学習者中心の学習は個人の動機に根ざすもので，個人性を持っており，学習者によって評価なされるものである」(1969) と説明している．リンダサークルにおける集団練習の中での青木先生の個別的指導は生徒のやる気を促し，従って指導方法として成功していると思われる．

(3) カラオケ習い事は文化の伝承や会の保存を重んじる伝統的な習い事と違い，組織，活動が動的，生成的であり，歌の表現自体も自由である．

他の習い事と比べてカラオケが人気が高いのは，次の7表の富士老人福祉施設の趣味の教室のデータから明らかである．

表7　カラオケと他の習い事との応募比較

老人福祉施設の趣味の教室　1996年横浜にて				
	第一期	第二期	合計	
	応募者/定員	応募者/定員	応募者/定員	倍率
カラオケ	188/20	191/20	379/40	9.5
英会話	67/15	52/15	119/30	4.0
社交ダンス	108/40	82/40	190/80	2.4
民謡	34/15	30/15	64/30	2.1
太極拳	38/20	38/20	76/40	1.9
ゲートボール	19/20	15/20	34/40	0.9
茶道	13/15	8/15	21/30	0.7
華道	7/15	13/15	20/30	0.7

実際，横浜では沢山のカラオケの会が生徒の自主的活動として誕生している．富士老人福祉施設の生徒の中ではカラオケの教室の期間が終わった後も引き続き練習をしたいという希望が多く，そういう人達の手で自主的に12のクラブが作られている．

すでに述べたように，みはる歌謡アカデミーはメンバーが公共のホールを借り，自分たちで音響設備を持ちこんで一般の人のための舞台リハーサルの場を提供している．定期的に開催するカラオケコンテストは出場者が100名を越え大規模なもので，それは横浜地区のカラオケ愛好者によく知られた存在である．テレビ局と合体してやっているカラオケコンテストはその地元のカラオケコンテストの成績優秀者にプロの歌手になるチャンスを提供している．

LPP理論において「学習者は単に既存の文化を受け入れるのでなく自

らある文化を創造する」とあり，みはる歌謡アカデミーはカラオケを媒介にして各種の新しい文化を生み出している旗頭といえる．このように文化の伝承や会の保存を重んずる伝統的な習い事と比較して，カラオケ習い事は組織，活動において動的，生成的な面が多々見られる．

自己表現においてもカラオケは伝統的な歌謡と大きく異なる．伝統的な歌謡は「型」があり，生徒は教師の歌をそのまま模倣することで技術を学んでいる．

長唄学習者の何人かに「長唄では独創性や創造性がどのように扱われていますか」という質問をした．彼女たちは「生徒さんが上達すれば，教師はその人の独自の歌い方を認めていくようになると思います」と答えた．次に「それではその時期はいつ頃来るでしょうか」という質問に対して，「10年か20年か30年くらい先でしょうか」という答えであった．私がインタビューした人は長唄を30年以上やっており，年齢も60歳を超えていた．それにもかかわらず自分たちは独創性や創造性を示すほど熟達していないと言う．それは幾分謙遜もあるかもしないが，長唄を自分の好きな風に発表する機会が本当に訪れるのか現実問題として疑わしい．

伝統的な歌謡に比べるとカラオケのほうがずっと自己表現の余地が与えられている．カラオケの生徒の場合，自己表現は現実的には一部の生徒に限られる．大抵のカラオケの生徒は歌うこと自体慣れていないため，メロディーに合わせてきちんと歌えることが目標となっていて，自己表現ということは現実的問題とは言えない．もう一方のタイプは歌の上手な生徒であり，この種の生徒においては独創性や創造性は不可欠な要素である．事実，教師はそういう生徒には個性にあった歌を歌う指導をしているし，カラオケコンテストではプロの真似をした歌は高い評価を受けない．

夢カルチャーの鈴木先生は「表現」ということについて次のように語っている．「単にメロディーが歌えるのでは，その歌い手の個人が表れていないため，表現とは言えません．表現とは自分自身（自分の感情や考えな

ど）をパーフォーマンスの中で伝えることであり，芸術のエッセンスとも言えます．聴衆がその歌い手の個人的なことは知らない場合でも，歌を通してその人のことが何か伝わったならばそれは表現として成功したといえます．カラオケにおいて表現は単なる音の再生ではありません．情感や声を調節して自分を適切に伝えることであり，そのためにはそれに見合った技術が必要となります．そのような技術を習得して自己表現ができるようになるためには，援助が必要で，それをするのが私のカラオケ教師としての役割です．別の言い方をすれば，私は技術を教えるのであって，表現する対象を見つけるための手ほどきをするのではないということです．」

(4) 学習者はカラオケを通じて自分のアイデンティティーの変化を自覚している．「自分の変化」に関して，健康が回復して自分に自信が持てるようになった人もいれば，会でリーダーシップがとれるようになったという人もいる．

「カラオケを習うことで自分が変わったと思いますか．」という質問に対して，多くの生徒が変わったと報告している．そして次の結果からわかるようにその変化は複数の面で認められる．

表8　カラオケ習い事ごとを通じた自分の変化

No. 1	他の人の前で歌うことができるようになった．	67%
No. 2	自分は歌がうまくなったと思う．	58%
No. 3	以前より多くの人と付き合うようになった．	47%
No. 4	自分の生活が前よりも意義あるものに思える．	43%
No. 5	健康が増進した．	37%

リンダはカラオケを通じて自分自身が変わったことを次のように語っている．「私は以前はカラオケは好きではなかったのですが，ある日，カラ

オケバーである男性から一緒にデユエットを歌うように誘われて，初めてマイクを握ったのです．それがきっかけでもっと上手に歌えるようになりたいと思うようになり，カラオケにのめりこんだわけですが，私はカラオケを習い始めてから前より性格が明るくなったと人から言われます.」

みはる歌謡アカデミーのカラオケコンテストの司会者である木村さんは，コンテスト参加者の感想として次のことを伝えている.「沢山の観客の前で歌を歌うことはとても恐ろしいことで，自分の名前がアナウンスされる前に逃げ出したい気持ちになります．でも自分はそういう経験を繰り返すことで精神的に強くなったと思います.」

カラオケを始めたことによって37％の人が「健康が増進した」と答えている．研究員はカラオケ経験者からカラオケは老人ぼけや高血圧や肩こりなどにいいという話を時々聞いている．木村さん自身「以前，私は喘息もちだったのですが，カラオケを始めて以来，喘息はおさまりました．これは私の実体験ですので，カラオケの会に人を誘うときにその話をします」と言っている.

カラオケの生徒は歌を歌うだけでなく色々な経験をする．練習場を予約したり，色々な人に連絡をとったり，授業料を集めたり，コンサートやコンテストに出たり，練習のあとみんなで歌いに行ったりする．これらはみんな主婦の生活では得られない経験である．このように色々な経験を通じて今までの家庭だけの狭い社会から抜け，広い社会に出て行く．それは歌の技術の変化以上のものであり，その本人の人間性の変化と言える.

Leave と Wenger は「学習は学習者の実践のコミュニティーの参加と考えている.」その「コミュニティーにおいて新来者は初めは端にいたのが，段々メンバーとして活動を重ねると共に中心的存在に変わっていく.」「実践のコミュニティーの参加」というのはカラオケ習い事の文脈において単に知識や技術を得ることではない．それは社会での人間関係の広がりを意味する．Lave and Wenger は従来の学習の概念である「知識の内面

化」という考えから抜けて，人間全体における変化を強調している．自分のアイデンティティーの意識の変化こそ学習であるというLL理論はカラオケ学習者に当てはまる．多くの生徒は経験を積むことで人前で歌を歌えるようになった．ある者は人間関係が広がり世間の常識も沢山学んだ．ある者は肉体的にも精神的にも強くなり，性格が明るくなったと感じている．これらはまさにアイデンティティーの意識の変化といえる．

7. ま と め

この論文のまとめとして，(1) 社会集団への帰属 (2) その社会集団の実質的参加 (3) 個人の目標の到達，の三点をまず明らかにしたい．

日本の成人の多くは社会集団の帰属の手段として習い事を始める人が多い．相互扶助意識の強い日本人にとって，社会集団に所属することは色々な面で助かることが多いし，日常生活に変化を与え生活をより楽しくするのにいい方法であろう．また自分の好きな分野での知識が増え，技術が向上することは嬉しいことでもある．習い事を始める理由や目標は人それぞれである．

習い事を始めて社会の集団に帰属すること自体は難しいことではないが，その社会集団の実質的な参加は必ずしも容易なことではない．帰属する集団の環境が必ずしも自分の望むものであると言えないからである．例えば，伝統的な習い事においては家元の制度における上下意識は根強く，望む人間関係を結ぶことは難しいし，また旧来の慣習やしきたりは会を革新していく大きな障害となる．そこでの習い事は型が重視され，生徒個人個人が自分の表現を伸ばしていくことは不可能に近い．そういう習い事の環境にあっては自分の目標を到達させることが難しいと敬遠し，もっと自由でより平等な集団を見つけたいと思う．

そこに登場したのがカラオケ習い事である．カラオケ習い事の人気は単に一時的なカラオケブームに支えられたものではない．カラオケ習い事は

費用があまりかからず，特別な音楽的背景もいらなく手軽にできるのでとっつきやすい．またカラオケはその会の組織自体が新しく柔軟で変革しやすい．したがってその社会集団への実質的な参加という面においてカラオケ習い事は色々好条件がそろっていると言える．事実，カラオケ習い事の生徒は新しい文化を創る形成者として色々活躍している．そして歌が少し上手になればという軽い動機で入会したが，実際には歌以外の様々な活動にも参加することになり，そうすることで世界が広がり，新しいアイデンティティー意識を持つようになった．個人の目標は様々であるが，カラオケ習い事は自由な雰囲気の中でその個々の目的を達成することができる．

伝統的歌謡の習い事の低迷，カラオケ習い事の人気，この現象は日本の成人の帰属社会の選択にある示唆を与えている．日本の戦後の社会は，伝統的集団社会の中に西洋の個人主義思想が入ってきて価値観が変わる変動期であった．人の調和や協力が強調される社会の中にあって，個性，創造性，人の平等が価値であるとする考え方が入ってきた．日本の現代の大人はその両方の価値観の中で成長期を過ごしたため，その両面の性格を帯びた世代といえる．彼らは他人との関係を重んじ，集団組織に所属して社会との繋がりを持っていたいと考えるが，一方，個人の自由な生活を重んじる傾向もあり，自分の自由な行動を制限する組織の所属には消極的である．

日本の多くの年配者は，忙しい会社生活や家事のため今まで自分がしたいことが何もできなかったと感じている．その責務から開放された現在，自分の長い間の願いを今こそ達成したいと思っている．そしてそういう人が所属したいと思っている組織は今まで経験した家庭や会社とは違った，もっと自由で平等な集団である．歌が上手になりたいからカラオケサークルに入るというのは二義的な理由であり，カラオケ習い事が好まれるのは，本当はその組織の体質そのものが現代人に合うからである．カラオケ

がビジネスとして廃れてもカラオケの裏に隠された個人の表現の喜びは生きており，それを促すカラオケ習い事の環境は今も支持されている．カラオケの生徒は，柔軟で比較的自由な組織に属することに居心地の良さを感じ，そして今までに経験したことのなかった自由な自己表現に喜びを感じている．さらには生徒の多くはカラオケの機会を通じて広く社会参加をし，「新たな自己の発見」を体験している．カラオケの生徒が学んだものは単なる歌の技術や知識の獲得ではなく，それを越えた人間性の変化である．この新しい習い事は，従来の「学習」の意味を根本的に考えなおす上でも注目に値する．

参考文献

Anderson, Jennifer L. 1991. *An Introduction to Japanese Tea Ritual.* Albany: State University of New York Press.

竹内　宏（編）1995「1994年カラオケ白書（クラリオン）」『アンケート調査年鑑1995（下巻）』並木書房.

Goodenough, Ward H. 1981. *Culture, Language, and Society.* Menlo Park, Cal.: Benjamin/Cummings: 54.

Hammitzsch, Horst. 1980. *Zen in the Art of the Tea Ceremony.* New York: St. Martin's Press.

Herrigel, Eugen. 1980. *Zen in the Art of Archery* [Zen in der Kunst des Bogenschiessens]. Translated by Herrigel, Eugen. New York: Vintage Books.

Hsu, Francis L. 1975. *Iemoto: The Heart of Japan.* N.Y.: Schenkman Pub. Co.

福田伴男　1996『カラオケ健康法』ごま書房.

金田一春彦，池田弥三郎　1978『国語大辞典』学習研究社：1462.

Lave, Jean, and Etienne Wenger. 1991. *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation.* New York: Cambridge University Press.

源　了園　1989『型』創文社：9.

NHK放送文化研究所 (NHK) 1990『日本人の学習』第一法規出版：216.

Pope, Maureen, and John Gilbert. 1983. "Personal Experience and the Construction of Knowledge in Science." *Science Education* 67, no. 2: 193–

204.

Rogers, Carl R. 1969. *Freedom to Learn.* Columbus, Ohio: Charles E. Merrill Publishing Company.

Spindler, George D. 1987. *Education and Cultural Process: Anthropological Approaches.* Prospect Heights, Illinois: Waveland Press.

辻，古野　1973『日本人の学習』第一法規出版：6–7.

Wolcott, Harry F. 1987. "The Anthropology of Learning." *Education and Cultural Process.* Illinois: Waveland Press, Inc.: 48.